雪中庵

定會援萃集

全

911.3
セ
(3冊揃)

叢畊堂

こゝの人葉を詠ことのは詩となり
きゝ物うたふをみやしめんとおもふをおのは
詩を轄に其訳きよ綴さするなり
つゝまし知らしとく一流門のなにしきる
なりしを嗣しとき命取さ常の詞哉
世ゝにかはる也んなる座たつゝ移て草を
書めつゝきを犬筑波集のあふるるときなり

かへしの年和ちゆくてならぬまうけ見えたる
運坐る会といつき人をれ俗習を生じけ尚
名ある地ハ更そのいたちゃさて喰呼ぬ
おもむきを守事ハかなくともすきを撰ミ
去を識出そゑみの意味をさとむへしと
拔萃俳の編ま欲湖亭ちさよめま

萬味 信

雪中庵連月發句會拔萃

秀逸探荷之部

正月分

拙流まて菜より多き菓立しり　嵐齋
あまたる菓や求くしく藥草　普成
ふく絶鮒の順ハ光きる觀燕　午心
列見や名ゑゑく松の落ゑ擡　蕉扇
列見や繡代見付く蝶の集る　杜陵
錦木をさて出し落し闌　東塘

麦の秋やかこち顔なる傀儡師　萬海
二階より里冷は浮菓や二日灸　如雉
松乃根や給燵て人もなし　丹水
杉ま印蒜乃鮮ふみてまかり　仝
さむしろも昼に仕へる女乃郷　仝
菜の花や文庫せかける並木松　升古
川風や十節の継も松乃漂　名雪
中川の花繕茗好優を誘まかし　山松
三尺は魚に鰭なし汐干狩　蒋笠

鶯啼藪木や着乃素塩　節句
中川やむや飛ともなく蔭の穂　有賀
呼系は流きも見南き花は中　ま秋
麺や大原の川辺乃むとつ家　槐市
二日灸さしおハ右へ寄ミての年　東壌
野てつまてつのひとぬ木瓜の花　松飲
なりなるは柳みしかく足まる地　牛貫
三月の猿も是由れ大根の芽　石嵐
三尺乃大根も流く皇梅の増戸　嵐鳥

堀坊に嵐も穀せうめの花　蒼耕

二月分

釈仏悲いく日も雨乃ふる　嵐高
たち雨や人写書き六百所　李冠
春雨やそこのむつのし紀松蘿　普成
海棠や記念は他に耕さん　仝
鳴鶯や旅の行業因に多き　よし秋
雨は日や蛤売は又きと里　仝
蓮いまき泥の中なり涅槃寺　仝

落る日も山際に川や茎は海　鑚葉
草は葉は危しそれ秋の蝶　岱我
炉ふさぎしや梧は枯葉を一落し　仝
拾くさるや魚を南に多く住　李冠
鳴鶯や何は啼る雀乃子　仝
鰯は血を刀に好かれたるの雲　青湖
茶摘乃蓋採るとし孫たん当　孤仙
うらら書は流るを称く人の飛　由岐年
峯は杳を見てゝ工の緑穂人　杜陵

刈人の行まへ絶て蕨に径あれ　嵐齋
花は際国や側らく草霞道　仝
山嵜きや鶺鴒の落る傘の上　淇輿
なくのま日や物屋の椽に古簾　仝
うちむ絲ふや女は持てる佩刀　仝
営うやなうせ休める小かり里　松飲
かつらに絶て皿乞しは茶より雑　仝
春の鐘憶古の後にむさしなり　仝
寺ゝ手ふ疾き舐きあり春のふ二　善味

大根に辛き味あり二日灸　眉石
家痩を蚕にかけてもうる利　仝
吹上て盆や余寒は月ひとつ　仝
一葉にらしゝ秋しらんさ（尋）蚕　年心
去る日秋や敷の見えて巨燵の子　仝
物かゝや七十五里丸麦畠　仝
寺ゝせふ雉は飛入ぬ巣掛蜂　月丸

三月分

麦秋や荊務せしわ杜若　秋兎

荊眞ぬ方なし家の麦の中　升古
ふるさとを驚し鳴く時鳥　普成
蜀魄降リ也蚕も糸に成ぬ　手尺
あら眠也浮世とて名ハ云じ　仝
とりし男の子也捻ぬみも笑ぬ哉　仝
道あそふ草に論ありたの舞ぞ　秋兎
夕すゞみのうしろや雨の梅あまよ　仝
氷をきる諭も志し菖蒲太刀　名雪
子も子ぬ水を渡る平千隈川　方壷

佗人也夏もいるる山下住　桂佳
さゝがにや堤乃外ハ海の音　落笠
入梅晴也蒼ぬハ庫に表　鏡嚢
まゝ乃手に松魚提し侍男哉　よし秋
白蓮乃動く淋し粉のうら　仝
部の清く抱ていねたる夏の月　同舟
風座と弁して盆を羅織　よし秋
雲の村也五月もすてぬ人通　升古
黄を咲をまても先あば小葉のあり　風齋

発見もなき藤ある旅人　豊年

四月分

樵女に手綱とらせん競馬　有賀

猿丸が落さけるくせ菖蒲太刀　鐙裏

孑梅の指に鰭生菖蒲太刀　普識

野のさしハに来る菖蒲太刀　月丸

篤筏し樵門の鷄並ぬ停　杜陵

浣洋乃傑にゆかの涼暑さかな　槐市

三度つゞ箸を回すく吹つきまり　嵐窓

咲かけ野有て秋萩の日影来る　仝

うらゝかや船に腮を洗ふ人　东塘

枝に停鰱も汲哉ちり柳　仝

篠乃径並りけ露くの柳　ま秋

わさび野猿し具たる菖の毛　仝

旅人ま遊ぶ小てきるなきつきる　仝

うき雲のさめて淋しや嶋の破　仝

鰍の宿麻さま達磨ハ出ぬ也　眉石

稀きまに語まへ耳のまさまる　魚山

兄弟乃寄残おそく火串哉　竹鳴

鑓持や聯にかへては破れ琴　千喬

秋の衣や月見て喰へば盡まじる　岱秀

入競ふ雨をてらしすゞの灯　松欣

本拔乃袴まとせる薄羽織　石嵐

薄羽織田も三園に雨を凌き　丹水

六月や磬うぬるおもき雲の絶　杜倰

合歓咲や硯桶を洗ふ濁り川　如碓

五月分

二荷乃水一荷は柴やせきの峯　舟也

骸骨の出縁りし座り簟　月丸

高山は樓桐花咲ぬたるむしろ　淇奥

蝉あしや刀さしたる山法師　仝

井の底残く中之梅雨の雲　志考

よんどころ楊枝乃人さゝる梅木　仝

心つき月や庵を焼も線のうち　眉石

甚の秋は何しけくそ破太鼓　仝

かゝふり炊の出る石八志しぬ之　名雪

清ろ门蚕行蝶の流を學　よし秋
むらさきの腹ふくれて菖水　仝
座ちや冬されの霧を干まき　李冠
村千や廓下は日影松をさく　岱与
叔すゝや近つきあき橋何　仝
さらし井や比叡根生の法師原　丹水
四つ辻へ四人すわり小鐘を　杜陵
梅をちる焼も来れ田植笠　仝
車八例女のひとらぬ塗らん　松欣

まさる男の袖にも知る五月雨　東塘
若竹や折りふしてゝ風の吹　仝
清香や月に明けて雞か酒　青湖
手細よ綱まるとしよ安居の祢　善成
子を石躍る竜の欲あり嘉定録　竹鳴
眼よくくく柚にむかふより山　柳雁

六月分

全き紙売る出す恥よ傍の袖　落笠
夕暮れ杜秋やさとり太神樂　東塘

揚燈籠風も絶えず付　仝

柴胡干す遊林しや渡る鳥　仝

招かれそうで咲くや女郎花　よし秋

秋の蝶皆細眉に見ゆるなり　仝

長坂に二つ秋色見えにける　升古

秋の夜そ葦根乃湖を照る星　仝

むしきても鶉なよ小松半の原　仝

夜長し鶉夕日に見えて居る川　梅嵩

鶉や流星尽て秋を知る　仝

八月のふ二や十寸穂乃落出し　花蹊

鶉啼や衛も路之の左右のも皆白　青海

田の雨や捨ても起る蜂乃夕　湛奥改 群人

草根乃虫もすて遠ふ秋の夜　柳美

鶉鳴や目に御けの秋風波　丹水

水鉢や椿にきる樽も暮ふる　仝

七月分

仁和寺秋来し声もし栗拾ひ　有賀

草乃露の里なる同石　眉石

名月や何そ炬火門督の君　手以
新月や松に移れぬ石の上　才秋
秋の夕おもしろき迄淋しさよ　仝
蜂乃猿谷越へて岩を通りけり　安紀羅
猿猴の門ゆく見るや秋の雲　東塘
秋雨や蝶も田貝も流れ居る　松飲
蜻蛉や山をかゝる草の露渡　松几人
萍て行蜂や誰し小簑越　秋兎
菖蒲の…や名所の出かた　仝

四手折や戸鹿の明し雲の程　槐市
稲の中より鯱乃竃この那し　斗扇
桔梗活てし床うち払ふ和歌さき　仝
かけま風荒しをなさの栖ふ　仝

八月分

湖乃へ縁りを営み秋の空　普成
家古庵に住し秋の十国子　東塘
茸狩やことに中子乃出陰等程　鏡嚢

掃よせて焼捨山に栗の毬　嵐音

暁乃雲や月ゐも後乃盛　仝

菊ハ山も菊にしら葉の滌ゝ　仝

初霜や秋乃釼気に起心　年心

牧珠みせて莢落の皺や関角力　仝

秋の来や四瞻見るのに金屏風　升古

椎汁月守人ありて山涼し　仝

蟋の夜や蠏の一間乃無し盆　金翠

宇治てても髪ハつるし葉小袖　子心

稲穂酒名主の跡子復せし里　花蹄

淡も秋乃残る穂たり新酒樽　孤仙

新きりや菜鄰の釜に奉露　石嵐

栗吹紫して芥生の葉落哉　松欣

雀ふも追へ川明の秋かせて　青州

泉傍ハさま篠掛よ庵かたし　由岐等

山ハ木や日蔭くちあて木の実哉　呑龍

大ちよ清剃むに瀧も重て洗　群人

九月分

うし絵吹有明るき頭巾かな　普成
頭巾廣き舞よ眼の老まで　鏡裏
うらゝに撥ても見へし大海鼠　蕗笠
雪汁や水に流るゝ斑の布きれ　仝
勤めせぬ所て居るも紙衾　筑齋
蔓のあるはこびりつ冬の草　手心
ちゝちゝし高音に来る古屋庭　仝
仏名や膝に伏せる鉢市女笠　拙飲
掛も一藝にして棹の歌　仝

銀夕に霧もならぬ帰り花　名雪
皿鉢の新しき音や師走越　掛嶠
人は聾く嬉りは深し冬の山　仝
風や出てゝ夜に散るゝ山の氷　金翠
かゝ臼に投る業多し冬は雨　秋兎
年くれ清し千夜の借ふとん　仝
雪は蓑床の山より雑々見ん　升古
雪の傘破れし人はみえて練し　仝
枯芦乃井かゝるゝ尸への那　よし秋

紫の秋野に別るゝ衣哉　眉石

十月分

寒さ迄師走ハ春めしぬく気なる　有賀

千仙や見る人ありて立職く　名雪

図画ハ金き銭見ぬよ暖なる　卜秋

春なる木ハ跡りて安し冬の山　仝

白拍子も豊ふ罷あり法佛名　方壷

佛名や暮来ありきハ雪の経　普成

恋しくも切りくたしも寒きこその　嵐嵩

鰒汁や飛さ泳して嵯峨ゝ住　東塘

巨燵の男並く帰帆よ出しけり　蛙鳴

餅をつくきやからを老の耳　月九

思ひ撫かくらせ貝ら寒の霧　松欣

かしつけをのりまで鯵乃冬はしも　仝

年忘れ水も暮し美人まで　梅鶯

しかも市積の上野いつまし　仝

露をも黄落葉深川や吹しの市　金翠

障子ふも黒ハかくまでの冬哉　名雪

小松や松にかき消え松の影　東洲

枝の戸や蓬莱の壁に香かな　群人

けふ乃降ることの清し蓬莱漬　李尉

吉書から汲し紙と不思ひけり　嵐扇

聡を定まぬ長者二代の那　仝

十二月分

古暦六十年は未来記哉　蓮笠

仇人も都乃花よ年の市　普山

清貧の間ハいつも寒し衣配　月丸

法仏名離魂乃姿をかくしけり　松欣

何隠る梅の法墨や法佛名　眉石

すゝ払や仏も移る金魚槽　金翠

葉煙草から飛ふ傘の入そよ特掃　東塘

田の家よ深き井戸あり帰り花　仝

うらうらは清水ハ去りし大根引　仝

茅てふ年や山から番は糸　仝

冬川や鋳鍛並ふ家たちの利　むさ人

夕鳥は霜に根年時芝人　仝

涼し人をよせぬ翠の葉やよし忘　如泉
引板も打ば添も打ば大晦日　花耕
涼し所しよき夜がある指揮　升古
山涼や炬きゝめきて雲涼し　李冠

仝六月之部

引見や高根の雪は夏を今　普成
引見や涼借乃物の紫一荷　蘇雲
嵐も運ふ色や奈良山なゝの里　有賀
涼しさや梅にお茶きうめの香　仝
花本望宇治の人とて優曇也　松飲
真の日と切のとしきり麻乃柵　仝
むさり麦は素ききも見ゆる之　よし妹
蕎ニ蕎より一日も我を見ん　三上

春寒し山のあいろも梅えかり　之上
乙鳥は笹ふ挿えぬ篠の奥　槐市
二日灸聖小睫乃ふりあ刹　仝
蚕時や鶯が様も明さなし　升古
桃さくや古の玄冥子鶏の啼　梅嶠
松山乃旬ふ来より花の芸　花耕
落葉ふつく子も春風の昼寝かな　仝
春へよても弦なき法破戸弓　嵐扇
すし跡ハ大根のなすよ源时か　仝

青も形し春が枝川月に浮く　秋兎
蚊のいより川見え来より二日灸　孤月
出を踏む跡もまえせん二日灸　名宝
曙やさくら柱史子紙急に水なし　眉石
浅き子や鶯宿梅の花ノ程話　杜倭

二月分

鶯は峰をこす之さなき山　普成
大海西やせいかりハいつの雪　青湖
山気き京に風なし　春乃雨　十秋

啞るせみや甚る枝に縋れ衆　午心
海棠や倚子ゟ酒波　鶺鴒　仝
海棠や粉し植るも光の侭　嵐窓
なし蚕のかゝるくや二日灸　午心
浪人も淋しき膳よ梨乃花　仝
温泉乃地獄一揆て新る也木の芽舒　仝
釈奠や剣乃なりし人もあり　仝
蕣の占点滴かゝるくしこの花　仝
春風や思ひ出ば思ふ渾天撰　鏡囊

市雛や明門の風まちぬ菰　嵐窓
鮮柳や道之し低の水をする　眉石
呻ひりし日に寒風ふきぬ乃海　麦雨
足きゝしに春て酒屋も清しゝ亦　方壺
花すや労を施き好きの茶屋　岱秀
畑打や圖雨そりゝをのをいふ　藻雪
三月や箱するの日向ほ袮ちけ人　蒲笠
むさし野ふ接き乏ありさむ　月九
瑞やや今ふ菜かく鴨の鬪　仝

さくらは名はかはりけり八重櫻　由岐年

朧月松を空より見え葉の列　李冠

杏は根にちりて蕨まゝ翻る空　仝

滝さへも光り降て蔵るゝ氣　松欣

宿食也火箸を落るあつさ哉　午桂

まきるゝを見よ此空をそ蝶多き　杜陵

河水や竜は杭より先く立　仝

三月分

麦秋也見る人の眼きゝ去りし　如雁

世憂さは前まで耕をまた経　午心

なゝきす寺廃し杜丸の晴を雲隠　菊成

多くの日も走りぬはしら白のむしゝ浪　午心

帷子や人を赤る縁の衣をきかぬ　仝

夜木立柳は曲まて別きまき列　仝

永繋しすゝきは晴を誰か知る　仝

ゆふこゑ山は深きを清しよす　仝

果子鳥清よむ如く嘯て居る　仝

一吹の風善かは寂しき柳この雨　看賀

蝶乃出る山ともみえて枝鯥　岱水

競る見えし抜ひくて歴童かな　環之

一日れ的射破つてしまひけり秋　青洲

卯の花や紀康の門にさし拵し　仝

餃乃耳に我かいふことも沙かなる　竹鳴

隙出しく人にかゝる扉かな

索子や鳶乃紀稽二度濯る　梅嶠

四月分

今を盛る競之拵る清さかな　有賀

若葉線打て睦し菖蒲太刀　鏡裏

鹿遊れ柳をあてる幟かな　普成

一つ傍の雞銭福沙枝の露　如雄

暑日や人を歎く楼乃琴　眉石

茶吸るいつくに吸つてなのむそ　東塘

降度に羽も出るこのんこゝる　仝

手みな帆の疾きも及ひ其の海　仝

猿を手に日かな絢拵し豆乃蝉　嵐夜

汁し丸豆磨八わに洗ふ古望　杜陵

眼はつきハ拾ともしらぬ藤かな　石蕪
夕立やちりハ又咲く花いちご　梅翁
山おろしや婦より並て速疾鬼　撫市
出るより蔵まて寒し桜のき　岱水
梅の香ハ誰か為なる仲媒人　仝
蓬さくや宝鐸咲て雨淋し　松欣
泥亀の艸を吟ける暑かな　仲鳴
浣ね干しぬ丹衣夜の風　方壷
蹴まり囲にかゝる姿も夏の風　李冠

隻竹心なき厚くありけり　有賀
生浣ふ手も佛くと蛍の水　丹水
あつ柳葉打音に動きけり　由秋

五月分

晴んく畳るる子供のたゝ舞しろ　菁笠
よれ菖をみしあまの篝　杜凌
史を見る為あも掛て偉身手　仝
入梅の蔵おわりて咲て佳廻り　年心
山蔭や百合は花き雲くし　仝

大雨はれて後清き夕かな　十秋
君着し同じ点する人ぞ里　仝
さらし井の縁りや杜若蝶の来る　仝
榻の下へ掃込まれり風の皮　仝
夕さらは先へ飛ちる青葉かな　東塘
六月やさらり枕のあきところ　仝
雲午や刀自ヶ濡るも須戸の雨　松嶮
一嵐来り村雨て時のいさゝ　竹鳴
久に去る樹を伐らぬ何処なる　仝

かけ三やかつ其色も定知る　名空
帷子や何ふくろみし付の皮　嵐窓
大和路に淋しくもなりぬ百合の花　如雁
おしまれて流るゝを又し鶴の羽　千喬
車まく笑ふて年に一秋沼　李尉
芦の葉も人に案せ守暑百日　青洲

六月分

角力はな流れて水生るまに　十株
風もなく里知るよ夜の仏業　午仏

川音や山に降る秋の雨　群人

月見客河もて山の遊糸さ　よし秋

名月や瀬乃めぐる柿かな　東嬉

志らぬ秋や清き雲の立ぬうち　仝

秋の雨ふるや都は静か也　如雁

すゝき残花えらん涼しの声　糸遊

落る魚浪中渕に来乃なるらず　白羽

稲妻や鯉の躍る江の濁　群人

吹きぬ秋や家に居ながき風の頃　仝

方角の志らぬところや芦の花　月九

星祭や浮ふ八月乃山かゝり　丹水

七月分

九寺は地も藪多し鳥風　蕃成

家庭の月見てふ見残も照秋ぞ　午也

月見るこの寺は燈籠の山おろし　仝

新きは也檜をかゝる一の雲　仝

今朝秋しく樓船よ染まふす扇かな　松欣

吹かくす時よ稀に荻は風　仝

秋風や髪はつれ山住居　世紀羅

山田に吹もあらきの穂乃嵐　升古

萩にしは連架は先の天地之　丹多

傾よし秋松ゆらもむまつ稲雀　十秋

ミ有蚕は世々施餓鬼のこゝろ紫　環之

月さえて晩稲の実くらしたる　仝

小松原鄙をわする手作鍬ゝなる　槐市

八月分

う鋲そのうち見ゆる夜露の轡打　錦嚢

塗物に人新さびる夜寒の季　普成

唐犬を先に立たる利蘭将　仝

さよ更て秋櫃に嘯や九月尽　十秋

秋雨の晴まく山は天の寒なり　仝

かゝりに垂声ふかゝり秋乃鐘　花嘯

夕芙蓉天移る時をさりとて　仝

菊に佳気湯でたゝぬるきさし湯　年心

生作のさ地ハくれし秋の汐　仝

本秋新の擬にさきかさ蜘蛛の蟬　仝

一望に名を知られたる後の月　梅嶠

椎茂の葉ハ光る所り動きけり　萍笠

淡月と持伝へしぬきぬき櫨　東塘

雪の竹引来人の行来や茅の宿　麦雨

秋の扇と忘らるゝふみ分　嵐翁

二三日星に入しよ雁の声　仝

せきれいや塵に草の香を荒さ　石鼠

渋柿や山に向へる破風造　群人

川風や鍬ハ心の雲に消にけり　仝

木の多き地ハ征遅し秋の雅ぶ　青洲

九月分

丸頭巾秋も廉忽ハなかりけり　普成

頭巾着てもまだ物憎しや耳の穴　子心

冬枯草実りて松の実生ふ　年心

小春日や又一さかり菊の穂　よし妹

み衣忘て老に花の都かな　仝

笹の落葉以つまの暮に掃ハそ　金翠

冬菜枯志るきを知る兵法五城　有賀

何恨む秋や継子菩提心　名雪
くさく秋名もかゝるて火桶かな　嵐高
山茶花の雪ハ風の吹日かな　竹鳴
茶漬や宵からくる都哉　完和
さくらの秋の力あり竹ら洞　仝
雪の日や話も尽し夕茶苦　升古
枯草や沼平ならて鳥の跡　眉石
鯨よる浦や荒さく木も見えず　仝
公廩の粟大唐もなりて秋まいる　丹水

恵比須講像の跨文々欠ニの秋　仝

十月分

暖るひさの筆の飛秋の錦　糸達
水仙や咲清くて沼みつ里　普成
情ある思ひのちあり冬の月　仝
身ん売もさせなり茎菜漬　仝
寒さや壁り借せよと風の源　嵐高
仏名や沙て戻りし渓の水　よ秋
地獄絵や見もなりおそるゝ　仝

旅に居て都へ出す見ぬ世かな　年心

葩も浅もきらぬ十夜寺　青湖

殺生原の煙に残る紙衣かな　金翠

鶏まこき寺の雨も水に入名の龍　群人

猿や秋その声耳も香その条　名雪

謡の家も三味ちんぴくよ寺講　竹鳴

破つて候清さ指入葉餐　月丸

年の内や江都の市人枝藏て　仝

冬枯山の家濡れ日見中るなり　仝

十一月分

千歳には霊枝乃巣なり古暦　奈逵

あるかりし火ハ淋しきこのよ年の市　眉石

眠や手に風も枝を亀の　仝

括や已をしらんに折数斗　よし秋

身ハ墨の曲りあり之並木の川　完之

秀の露井を嬢きの紅葉　金翠

法手洗さ紫紅しかり餘お前　子心

川千鳥明ハさひし石尾　呑龍

こ尾

大江戸に出てはなし手の鶯　作晴

襟頃に見知りし顔や袖頭巾　むさし人

雀の料不とハ書きつ色付袴　年心

卯の花も尾花もちらん緑の白　有賀

人形ハ髷もさして火桶の邪　東塘

相ぐ桶たきりけ絶へて掛入る　思聲

庵の落葉よしみささそそ足ゆるて　普山

擬ふくて西へ往
白衣を知る日の那

判者　雪中庵

禪雪菴

定會拔萃集

全

梓雪庵連月十八日發句會拔萃

秀逸花鏡之部

正月分

陽炎や一脉揺てゆく葛畑　石嵐

船より家はほのみえて霞かな　仝

吹尖も白もまだ雪よ梅の花　松欣

香見乃女罷りたかねの雨　仝

春の風ひき出すとゆるく　梓霄

稲苗の中やおちちよ出来ず秋の露　華叡

夕掛田水をしまはすしのさき　仝

田のみゝ日のあたる也さつき雨　在魯

まひら川首も嬉しや下駄にし　仝

わかしもかせまて営す相生の梅　芳竹

春みゆくや雲雀大路立て見る　仝

内宴や須磨人も渡も弥のまて　松飲

菊しほや沖におろしの破傘　丹水

一ツ家に免る浜乃立縁に　仝

弥陀もく家井の池や芦の角　由岐年

世さ後の春と見え宮や梅の花　仝

霞の宮二日浮くなりにけり　月九

二月〻仝

花の月日数ふるさとの氷さへ　紫扇

花まへて灯けや増荷かり　仝

旅人やおかきくる揃すす　玉桂

松の蕊夕の末了三日坂　蓑笠

花の瀬りくる昔で雨行なおかれ　月九

見れば吹しけれも白日の壇　仝

紫巾もて月暮る倦つ日永　千樓

雨堂にやまぶきのてしをと柳　仝

捨寺に親なき人の囀中　豪山

蔵ひ乃霞こぼれ芦の角　丹考

笠掛し酒もんもとの山　史岐

柳はらの藪菜もちさし時代縫　杜陵

はらや花よ飛つも若のひつ　仝

笛乃上手鼓謝のよるや春の宿　松顷

根分して菊よ南くる鈍気哉　仝

ともみ田や花咲いて何きま何　在魯

三月分

先境

子なしやあさく草かくす　秋兎

願しきす車轍の井乃さくら　三上

かきつばた鶯は木味よく如月　如雄

梅ましや七日さ霰　風斎

清めの坊も降てくの北つくく　近鶯

下野やさくらかなしみの露　風斎

至 を 山 漢 を を 気

風 松 奥 翁 雄

網すまる舟持せり館の岩 杜光
魚すくふ網揚しよ船のきみさゝ 風篁
みの入本の香よ残し杖埴 眉石
川々や夏をと脛の水よ知る 仝
柿本府の萱門建る四月かな 中波年
六月や只はさびしき橋の上 魚山
こゝもとの女のなさけも又涼し 如雉
夕颯も嬉しよ花ちる椎のもと 近鶯
堀のみる切通しおりぬ河らし 非鳴

四月分 仝
入梅くれやもふてよ雨ましく一脈儀 如雉
河原し豫よかせ足のつらう 風篁
市の井よお水のうる暑の形 仝
時よ蚊乃涼気も吹きはらし西 仝
門まろや蚊をとうち扇す雨のつう 湛奥
清宵や倉のおゆむ涼ふれ 山松
指よく古團扇知く芥もし水 仝
夜桜を魚や燭をともしまする角力之れ 亘昆

鳥の翔し人かし留守ま給ふ如　雁
夕雨や芬て吹めくる池の緑　仝
右は～きし戸さしせうち哥仂　扇富
蛍ちしらや園よおかく宮の上　冝見
梢係ふやまみ坐しるよ葉々繕　近營
夜の枝や犢斜吹し一行の裏　仝
辻と川踞ろふ踞風ろ扇のまはふ　仝
拇する也車貝の井よ咲添する　丹秀
件みする也古年ふの去よりか裏南　山松

七月分仝

お枝の井へとんせ也ほとゐ衣　山松
盃よ採るおふと去ゐふ涼さのふ　冝見
涼酒さあて庭よ奉乃兔かちま　松嵌
梦を舞と坐すふ古行ちつ空の峰　仝
のうせん衣ゐ翁の吹そち夜のちう　仝
蛍の法志つうの庭しまとう　中河
筏出しと浮まろうれしく　丹水
此ふ八合る作る芦うり南のえ合嵌　仝

蝉のこゑ日のさす峯に涼簾に　仝
蝉鳴しやよそにいつて蛍の唄に入　仝
蛍飛のかゝり淋し船乃雨　仝
夏の山平ら笹はさて剃あり　眉石
赤洞にひしき足を蘭草川　亘紀
天河より松有蝉の羽しき　風高
下宿や人まちるき涼風水　千桂
おし夢越ゆきひとし白き事　仝
六月分合

菜の宿に荻の風ふくや星まつり　其人
明や峰に山とゝまるたなばた　仝
時ふつて山を押す稲乃穂末に　松依
石竹の花枝まして来きつる　有聲
麻のこゑきくらむ山の手うち　仝
守しの声多しひきよせの銀に　亘紀
八月や庭川ときまる旅の手　三上
淋しさとゑうつ青つ秋の夕　石嵐
名月や露むけかける掛よみ　松依

田の水乃底まて落るよなかの影　子光

みな作る川ハ足を止めけり　丹糸

堤柳やまよ踊る杖の人　由岐年

七月分仝

昔ひこおもはれし星杖の夕　外鳴

月の醉に孫まて語りて世　升吉

路人乃劇なみたる草の露　松欣

露もし花のつゆつる乃様　むれ人

細よきの嵐に破れし津の声　丹糸

睡の舟筒きせハ落るまよひる　仝

過し莚も偲ひて掃除し　升吉

露の書のしつく傘なよかなふ　月九

魂もなみて桂へんらみのそれ　完来

蝉の羽乃縁に破れ乃声せハし　千桂

古柳やふよ鳴し虫の声　由岐年

みかん山も没し名月わかれ　月九

八月分仝

山寺暦て出羽にて鳴子　松欣

手広垣本ハ隈に先つれたりぬ　雁
附しく我鯉の鰭ふおもしろし　作鳴
手ぬるきぬしのれほき雉　升古
息栖の竹汝てきとし芦の花　松似
車にし流されても流るゝ水　升古
鴫の声海山ちかまし月の影　仝
八ツ網や池田伊丹乃掛まどの漬　蕪笠
枯の松のちらし八嶋に集まる　眉石
蔵かさる船や都乃の佳気下　升鳴

秋の山初には芳て見ゆるかし　荷宵
九月樹五でおちる西の白木　仝
江の月紅葉する八妻して語りけり　金翠
船留りはたゞ月をと軽き郎から　花嶂
錦てみの安まと定ん破りし　松似
暮しや竹西の亭入れ持けり　仝
九月かな　仝
あすの取詰より佳氣立縁の花　金翠
冬こもり與松川をひく気　仝

をし鳥や膝の茶も今二合　仝

青よしへし人のうへし冬こもり　竹嶋

紙子や地中まても我をむかしより　蔭笠

よき年ハむかしもさし餅の味　丹多

影ろんさのちりまても今日積る雪　嵐扇

埒もしや日の入迄も腰の物　花嶋

蔵の戸も千草の霜る風の吹　むれ人

戸口まて来る霜四つ手て鴨の網　仝

秋
稲無き地まてきれてすく蛙　宝珠花 桂浦

十月仝

時雨るゝ空のしるしそみる紅葉哉　李冠

冬月や寺に桜乃名乃流　むれ人

冬の夜月夜更八咫鏡そみる　眉石

明けてもいまさらの浦も曇哉　迂嘗

冬かまゝ霜千鳥に冬こもり　荷宵

なかれ葱も鴨の足よかゝもなし　仝

居寒のくさり千草乃月哉　仝

鶉おやかはる本しら日のくれ　竹嶋

帆くらに挿火のうつる寒さかな　四聲

さかきの葉錦見えて寒さかな　如雉

猿灯に餘さし女ふけなる　仝

冬されや祇園取付八幡たらり　仝

十夜にハ只病の夜をかな　月丸

芋の子はそれ芋に似て十夜かな　嵐菴

十一月之部

時雨るゝ灯に山深く尽白し　黛人

雪の曲笑ふ梅も枝さしかへ　芦笠

冬の日や暮て寒さよ花の色　李冠

生膾の小さき庭や芙蓉錦　山松

すゝ掃や消さすれさる灯の末を　仝

こゝ仮荷をて夜り縫ひて　仝

夕顔の昼も見り隠くもり　仝

山ちむし雪よ風邪ひ浮さよ　仝

主翁や酒飯の舟乃こし紀　むさし人

行よ見合ふ洗ひめて冬に掛車　仝

巌子や老れ安きも女好子　去欣

音声や若葉まで竹八巳ゝ内　眉石

二月廿六日之記

春の夜は梅おもて居る二月哉　千桂

戯人乃宿する町や春の月　芳舟

かゝるや寺まで梅の都哉　岱高

夕ありし風や柳の下ゝ京の町　黛人

春おもや女房は重ねほゝとき　月丸

池水の流れてきゝ桂の梅　仝

侍は火をともしけりまたくれ　丹之

称は足の冬するかゝれふ　仝

行く雁やむしろ一さしよ明き峰　在魯

大江の梅も月よりさきの船乃中　仝

鶯の声や振ひの梅もよし一てある　仝

鶯の夜はつゝぬけす蚊を蓮　松吹

初午や藁をとりかへして花角力　中吹孝

むし見る鳩待ていまさ車卜　蕉窓

蔵嗟

出代やうき世を残こたす壁の上　松吹

二月分六句

日の入りも流れつゝ竹の秋　竹鳴

桃ちるや押し当て揺れし畑の石　洪奥

黒くも着て義えて居りし小嫁かな　中吹年

みよしのの花に出て居る在所　仝

清鏡んや見さつても母の恩　杜陵

はるの手あつよ蝶むしらぬ　芳竹

沼の本よ蝶のもつれて芦の角　仝

不好の紙をすりて終る雪　蕉笠

八九分まは後の中で土生年ぐるま　如雄

さや鶯に露ふき遅るゝ今朝の鶯　月九
山道や人何とはなしの花　仝
三月分
六印
船よりはるゝたんし夏乃雨　松欣
はしまた八文橋より夕の暇　杖兎
まつりんや宵よせられぬ数ありて　完来
一口王子あつまりてかれ哉　仝
かつまみ楠し鼓乃花つ来　年種

出乃たへかり宮の姫まつり　風宮
きまぬ月墜落の上乃小なれ　杖兎
扣川山まで矯山の月とも限らず　三上
肱は脈より押流されし蕎の子かな　完来
縫ひまよ田あり家有子らが縁　松欣
走とりの花笋も池に浮ゝてり　千種
雨はるゝ人のつれ照射の火先丸　崇富
あしくもひのし山河りも用心　仝
四月分仝

涅槃会や木ゝ木に八重て宝寺る　淇奥

梅さかし若ゝ袖の人斗　宜児

蓮水や末の雪くし灯をかる　山松

雨に庭の垣よむしけり霞哉　丹兮

ふし詣おもひ立りと挿ゝ哉　仝

名ゝ手まく車に積ん出合哉　作鳴

飛よより一つの溜ゝ出まつりのれ　嵐窓

多ゝ芽出天はしみの柱の将　宜児

雉笠庵に玉しくの夭や枚の花　仝

春毎やおもし霞は梅のくもり　月九

夕ちる花唯よらむず蝶乃花　淇奥

衣のすそや唯蝶のことゝ紛るゝと　在魯

またゝ多やゝ人のしらぬも聖乃ゝ　丹兮

庭乃手も論よらゝの嗅ゝ合　嵐窓

外の井乃てぶし上やねかた川　玄丈

感嘆

耕ふ蛇のくゝ厨ゝ賑ゝふ　嵐窓

五月ふ六印

あら山やほとゝぎす会て山こゆる　近嵩

陸前の蓮の糸にて鳴かれ　宜風

孫よ夫母と娘とさみだれて　月九

娘の手も麦穂と生て男子哉　仝

私も白もしらせ梅や雪の花　山松

むかしの灯より行る羽かな　仝

六月や泥にふかれしふみ性　千桂

出雲の三芳本や蝉の聲　仝

一切無しで御伏をせずかすらし　仝

夕ぐれや寒はいつより雨や也　有聲

抱寝や夢にかへれも枕の情　松欣

世にふるも露は六喰ニ蝋の肉　叢高

太々しも着ると辞りも娘牛　仝

都にも住みぬる人の便も芝居　丹馬

二月ふ　仝

以ちを得角力にふれて白川原　有声

縫紅や雨まの中の濱風哉　生皎年

係香や塊様揺ら一ゆの雄　仝

秋立や花に好かる鈴の聲　竹吟

出さえもとこに程てし涼い荷か　仝

桃風や湿泉に花桃咲て日の暮る　花人

有明や罟流乃星子林の下に　仝

声の尖も京ハ太きし盆の月　月丸

なくとても其捨くほし鉦　在魯

芳ニ西野其の井乃捨られ　子光

七月朔仝

夕凪や汐戻萩に日の弱き　旅人

下廿一ウ二ノ八十

ともに柳しとゝまてもちらし　桂浦

きくも中航小蔭の裏はちきゝ　松欣

揚場より見てゐる秋乃夕ふ小　梅嶠

藤も見る七石の隠りよ手ゐる　仝

砂利川や落るの水と舡のゆく　仝

舡ころしして夜枝しかく蛍ばかり　升古

昔をおもふの軒ふぬハなし日暮かな　手桂

夕翁ふく空うやけしの人とよみ　仝

此ゆへや山の隣さ夜空きの汐　巨月

秋乃夜ら酒花の是か夕日かな　完来

感吟

草の花ゑ乃ときゝ草よ草刈　丹水

八月令

見あふや都も露のにほひ浮え　蛙助

ひよ旅て時も移らしト杵衣　全

身の事やたのゝ手につく田のゐる　花峰

小菊よ似つる松虫よ菊の宿　松歌

葛いとしき深みのつゝ曲り　嵐窓

さかしき月に恋しく夜や柳　秋兎

かなるを結ひと俵て送り捨し葉　今桂

京ハ人乃露に是へて草の字　蕉笠

枝の垢や竹など見ゆるハ桝乃舟　巨月

妙し萱て海など送る松の雲　雪尉

くるめしく耳立ちてなる杉ならん　眉石

木つゝきや坂の也了乃猿子なき　竹吟

氏れハ蘿を友なし松のくき　嵐窓

天寒えん中ぶの野乃隅田川　忠岐年

九月之分

蓮池て例ゟよ餘花を夜ぶり　去飲
月中よ鶴舞のためし沖餘　仝
きく作や名忘し小供と埴　丹衣
線よ佛の友ある女ゟ牀　竹鳴
こ様き花稲荷よ伴ふ鼻紙　落笠
澄よ鷹か山もいくらて庵よ　由岐年
すの雲なし宗の南ゟ任　風一翁
尸の外く梅と挽て忠ゟや木　李尉

山家よ扨の曳心し春はゟぬ　雄

十月之分

名宮や落との西へ天ほ鶴　荷霄
前火の跡ゟ宮め都ゟ　仝
日影々よ移れりて餘分ゟ　仝
冬川やさゝゝも臣ゟ松の新　松飲
たちつしと雪よハせしゟ月の鶴　ぬ雄
それ矣の緒紀ゟ行ゟ檜の元　月丸
豆の影も尽よ二かり清仏名　嵐一翁

鞦の鞦も持てきたやそこらの冬　仝

冬こもり屛風ほどは扇かな　眉石

かるゝさゝ梅さけて冴申ける　梅嶋

みられ失さし笠とて二階の行　仝

歳暮

巨燵抱て机を背に思ひけり　李冠

十月になりぬ

売物や注連のこりて松たちけり　蕪笠

雪ふる八幡の小家に人めかし　竹嶋

春ゆくも菊や柳のむかしかな　嵐二扇

扇てしハふるは是ことなりけり　仝

燵の夜は竹の薮となり隙ありの時　李冠

掛乞や捨ても不破の舘かな　なん人

きれ候やさらよも掃て臘の家　嵐二扇

銀も小晦日も断や大こ十日　玄夫

雷よ冬もかしこ菊のひらきかな　月九

歳暮

川端によれ山までも冬の時　竹嶋

判者

めくりの行ゑも見ゆはし合せかり

神尾 千心

言外庵
[redacted]
定會拔萃集

全

言外庵連月發句會披萃

秀逸蔦蘆之部

正月分

羽ころもやそゝろに京の町へ入　　有声

鼓ねる里も見えけり春の空　　如雲

春の霞名もなき山の縁なる　　其徠

雨晴山目に指すとうちの季　　子光

寒食や貞女が炊し家のうち　　巨月

挑灯の水吸ふまでに暮し　　子光

月花のあるじ去りし跡をさん儀　丹水
二ねんを経て母をしのぶ葉ざくら哉　嵐鉄
碗す人もなしの跡をさん儀　仝
春の陰捨てなき身も風情ある　仝

仝二月分

手さしぬる花の紹介も捧げむ　如雲
水の湧山耕してさえしらば　完来
雛雛や扇を添えて男の子　三上
つえすやそふし夕ありの去経　午捷

旅をの庵縁かし春の峯　三上
寺山やつくし思ひを康とする　倶奥
雪とり裂は樹々の中くるや桜　仝
山ゆかしよりかみなるはにくき峯　完来
山吹や庭へ剣する梓の水　嵐鉄
枯枝にかけて陰となし廻　嘉山
持てに折戸くるや朧月　仝
ぬるさや筆をとる竹の節　子光
手しの声破る芽ある摎かな　丹水

大根にむさし野は畑かな　如碓
よし野にも猿の子なるか心　松攸
枕なす芋蕎麦ならむ茶の旅　真山
取られの雛の猿も一の厩　田皷年
仝三月分
栗のむき蕎麦も秋の名残　三上
くりの皮泣寺ゝ出ぬ赤子　如碓
約竿の妹やなく春不可矣　仝
業さへ路にかゝるる四の宮　竹鳴

穂葉とも照射の笛あれ竹　嵐翁
咲くもありて遅桜椿子の花の香　年心
古き屋の伏見あけりや四月の　曲波年
こしうむく柳をりやさつきかな　巨月
涼しむ月見て塚をきさしあり　仝
夜の月にもとりかへたる　左帶
蝉のまゝ降るといひし岸辺に　丹水
青葉の深付き居ても名残り　仝
仝四月分

煤掃やちりもあらぬ海屋　嵐蘭

霊のうね樹に掛捨し階子かな　山松

売る人の行よ鶯の川向　仝

笄藻のふかく麗る蘭菊かな　仝

明て帰る戸に氷る田のあかる　仝

携子の跡て暖る人ものうね　寿心

かくれしや吉野を花の筏かけ　松欣

春寄の冷し桶あり花標　如雲

芋の茎の一摑ならず大根　迂翁

昔子が行そ居る涼哉　三上

用ありと携ゆ古月の露信　如碓

涼しさにあけ揃ひや桐の花　眉石

むしこ干あさ風にも四拍子　五彦

一ツ姿子鶯をで擁むむあわ　丹氷

仝五月分

丸いるの涼しさ古の花　如雲

家の楽や縦にさげし霊かな　仝

涼水井や置てき手挿所　仝

借もとり柳にまかり笛の手　有声

あさ渉む絹や藤垂れ松の風　三上

夏草の蓬の中のなかれ哉　仝

端居の後追ふ棹や笛の声　松欣

春の夜行燈切て終小雪　嵐鉢

船頭に水費させたる鯰哉　仝

庭木ちの白き手の月哉　如雅

燈油も寺のもしかやかくす　湛奥

西日さす地も用の田の白し　仝

ちかしや子能の秋や旅の清　子光

是よりの四十八瀬や今鋸の声　宜風

入船の水縄かさね雨の音　松依

隣ゆく鮎の魚の[illegible]　年桂

西にまたや橋下を渡る一盃　仝

加茂川や舟よりのぼる花の月　年雪

六月や鈴暑き真の種　丹水

雨の後もかかり花や夜の草　仝

桂も料理も心で是なる　仝

破れても袖ある衣の面　仝

仝六月分

子遊のおしや扇かむ舟　書佐

夜の雨の音をきく笛の音　有声

汐に浮し涼しさる風の響　丹水

はしら磨て屋けてある姫　仝

果樹子瀬戸して徂あ示　仝

枕のもと流るる山をめくり行　子光

夜の月大きくて入る　仝

むし啼や夢ゆるす蕣の少　巨月

仝七月分

月のおもしろ夜の雨にゐ　午桂

栄中家夜来の中一まり行　仝

こころよくちる枕の楊子　仝

荊棘の露さみしき月夜　仝

灯ともして夢のあとへ　こけ

たきくの水を吸てり枕の下　三上

蓮ふく池の水の桐の先　三声

法螺吹て兼遠ふ里越へ行夜寒　如雄

山ニ住む松や生木の紫二つ　仝

傘さしてある人や花すゝき　湛奥吏 なれ人

菜刈し灯の手ふ菜へ込る露　母舟

気の毒や那や忘れて紫胡録　仝

仝八月分

小夜ふけて心渋る影ふ箏　素白

新霧や兄あとみて妹の行　蟻仕

朝霧や腐のうへを帰る　幸月

稲妻や探ふかへる足の爪　望人

秋風や畑の菅斗虫の売　仝

蜻蛉や雨の晴間の秋のあと　仝

引切し手揉入るゝ縄　年桂

ちるもひの雨の面の水よりも風の声　仝

稲妻や壁の窓より灯のうつる　仝

うし枝や島の嵐落す大根の葉　なれ人

秋の水や筋違ふ作出る　仝

棲もの秋の風の蔭まで涼の月　仝

秋風や戸に建たる秋の窓　素白
八月やゐの生れし山の泉　埜人
柚見るや襟しまる秋の空　仝
稲識荒く車もとめ行酒なし　仝
申ふもすもしてゐる彩を尽むる之　平雲
非田地のもしまし柿ゟ限　黛人
手むくに傘さす檐も秋の雨　仝
隆止まりもしやうつりし月の友　仝
秋風や式のともす廊下の灯　花人

四斗樽に餅のたまる祝ひしき　仝
秋寒や釜の湯入り増の窓　仝
むすまあさひしし蓑ゟ池　巨月
戸口まで届く境平らすの庭　仝
修漆の松色に風の波　仝
秋の蝶安居のきぬさいしや　仝
蛙のたゝやまなきすぬ行くる　仝
秋の雨ふりや湖水も眼に近き　如碓
あやしく枯たりける戸口かな　仝

ホつゝやよく樋あり坂の家　乎声

中に新涼流るゝ水の流れかな　仝

石垣に水の湧くや秋の影　子光

ゆく秋の陰清らかに水の上　仝

枝の梯枝ぶり下に月出かな　仝

咲かける清げる令や茅るかな　金翠

秋萩や畑打つ竹格子　仝

彩ちらと仄かにかゝる蓑の茎　仝

夕山をわたりて茎のちるかな　仝

菊の鳥飛びありて涼けり　岸宵

花よりの一段と新秋の雨　仝

約鐘に鳥とまりけり月出かな　丹水

ひとりの鷺来にけりおの不けり　仝

秋の夕打墓の約ありけり　仝

彩りや丘の草と花と荒　仝

菊の秋草木におもひの庭の葉　仝

仝九月分

河原の暮菊見に坂のあかりかな　篁人

衛士に築のかゝり火の光之　雲岐
も門に夜帰なって掃除の宿　丹氷
川風や二十八宿を雲の上　金翠
舊の子都はしめと出る夜の雨　仝
下ゐともぬ人影見えし雲の門　如雲
大家はかつしゐ旅に川を越　如雄
荊棘を身のはしたの家の色　仝
詩箋に虫の喰ひの文字ある　仝
心ありしあとる日の夢に小さくなる　外鳴

十月や峰の嵐に樹々の冬かる　仝
風音や耳より聞ゆる雨の人　仝
炭の火を燃やす家にこけり　仝
蓑虫の声もありけふの宿　三上
鬼やら風に落葉の雲の花　去声

仝十月分

菜の汁の魚に湯すゝしてある　其人
大寺の嶋に川並んで行くや　月九
二三日霊のいまも命の雨　仝

詠て程や猿へきむすふ橋の霜　月丸

さまさま人の取しる手水鉢　仝

ゆふくれは桐葉より冬の池　玄脩

こしおきつ寒ふ星ぞなし　わと手

冬の月馬も栗木の宮の路　如雁

かけ渡す行の辺りて冬河原　仝

柳られ水澗空の高さの寒　三上

かれ柳ゆり葉針し経しく　子光

数はちる露や人なし風もなし　仝

うしろ見を馬の尾ぬくるれの灯　仝

表海塩も色の旭の寒　金翁

冬の庭咲きぬれは一ツ松　丹水

余の山にかくれて冬の名残哉　仝

仝十一月分

冬の潮高く落て居木の根かな　三上

冬すの霜その新膳の冬田つる　仝

砕よくる水も静て冬の月　嵐甫

雨雲やあまり去年よかり鳥毛牛嫁　仝

鵆をもある車より後の山　手心
夕されはかりそめに田の新　仝
山伏の大きく作れ雲楼　むれ人
岩本しけりの杉も雲楼　仝
雲の峰おもひしくと房の峰　仝嬰
凡の春に来しあるよしの筝　三上
桶洗ふよ谷(?)の雨(?)の手　嵐竜
揚羽まで春年も雨(?)帰る　望人
極月や磨にかりそめ浅一把　丹水

仝六月之部
桃の病田もしら穂に園ありて　如雲
明ぬ月大月まて祭らんず　子光
雲食や耳しき風の出雨　仝
帰るとて芹薪子あるなくとやうず　嵐舞
明きみも人まかれて妻の風　仝
仝二月分
咲きも交りつゝ野原の春の季　嘉山
花に為東雲後の雨かなし　湛奥

明ぬるや露に碇も一ツ八刻　完来

月と月にたちわかれけり妻の水　巨月

秋寒や妻の山添わたり寺　三上

水入りてそれ汲水の落葉　丹水

大内の柱寂しんたちの風　月丸

されし石を幕にて昼見妻の菰　豪山

深き秋雲にて鳴くや薄暑　子光

多羅葉に居るとまりの宿　松欣

仝三月分

晴た日りのあるうちの雨たちけり　嵐窓

鳴子ある鶏に薫るかほりけり梅　仝

秋月の夜やつくつく丸き大寺石　三上

鳴る縄や眉にかかれる山一つ　仝

むつのけしき月や立木立　丹水

仝四月分

宵の月一筋に落ちかかれけり　如碓

見紀に芦まる蛇や菓子ある　仝

宵もしや桐とつめの窓に入　年心

道ハ草の生しげり荒にけり　嵐雪
実あまりや身にとゞかぬ筆の袖　仝
さくさく蝶の売にぞ行　三上
しら露に川ふみ渡る米婦人　仝
飛驒猿にまぎれて旅のこゝろかな　仝
さし宿ハ椽に寝かせて打扇　以笑
又つばめ古のつめこむ楠の下　氏雪
京白坂の柏に塵より石出八　巴濤
仝五月雨

山につゞく岩ねを苔とうねうね　如雲
藤乃花しくれてまだ草花色　治めて来る　斗心
今日の夜ハ御まつりに涼みて[illegible]の愛　在魯
中くにかえつよめ秋の夜寺茶店　仝
橋涼息のものをつまとて[illegible]　千桂
月の山畑に虫のかられけり　子光
足かよひ[illegible]しくれ[illegible]　嵐絲
雪の[illegible]松の[illegible]抱まゐし　仝
夕の来る庭[illegible]八小　秀郁

もり雲や家の西窓寝て入　如碓

かけ川の夜や余所に涼しき風も月　倶輿

月のさしたる出て樹しや家の月　丹水

寝衣六印

菖蒲の露も石に生し松をのんで　子光

六下六月分

峰うつる山うら風のむかふに　巨月

夏川秋や蒜の落る軒の下　小木助

わすれ草咲きてあふける夕和らぎ　子光

梅の月へあまりて樹しけ松の嶺　丹彡

むしろや草の咲きて松の木ぞ　仝

仝七月分

夕の昇る山をしむ月秋の山　芝戸

雲の色や松の梢しげ笠のころ　如碓

毛秋や枯松のあける霞の底　仝

涼の生まる山に平たる秋　仝

草の花二よあまる人に見えけり　うけら

二すべて月騰静なる　素白

遠山や秋の夕風の吹やまる　むれ人
戸あけ物音の淋しき夜中哉　如英
枯尾や葉の乎てし　秋の空　年桂
戸ひあけや吹おとしける窓の秋　丹多

全八月分

秋立や雨の吹入る楼の庭　黛人
飛帰す鳥も見えて行のつる　鱗始
秋雨や葉の色の入る油皿　文月
志ら浪の上を過る吹の夢　一職

立誉て隣へ遠入おもやま　素白
出雲や吹きりける　秋の月　仝
打さ紙に漆てすほし夜寒哉　在魯
秋の気の夕月の流戸口かな　年桂
杯て手を吹まよお宮の社の庭　年雪
明月やいつれの根より煙の売　三上
何もかもゝのさ後山や高きの野　巨白
秋の宮ならひてとまる松の雲　仝
明月やあちらへのかけし后芙蓉　曲紋年

炉ちか川拾ふ手紬よ月の秋　如雉
おもしろ田鶴の来る裸杉　荒人
裸山ト人の噂ても居の月　仝
おつる手や婦川に来て雨の郷　金翠
打つ明し鶴ハ眼の秋口の秋　仝
ミ年の魚も沙風入て唐ハ寒し　有彦
石鏡に行手の治ふ目の荒る 下女ミよ　一境
白妙の喰ものぞ多し鳩の雨　丹水
大葉桂根の伸かかり夢の京　仝

蓼六下

女の縄ふ鶏の子ふり水の桜　荒人
仝九月分
指おれり穂芒の寒し　嵐高
物刈潤わたりに鳥のいろ示　仝
狙捨の足をかけたり ミ稚子ある　仝
寒さや倉の稲手并俵　荒人
皿の花も新の室て安りけり　絲鳴
手の鳥隣に人の銭されも見　年心

冬の夢日ふりて雲の嶺かな　如雲

さむさる隙間風の茶畑かな　仝

慢ふ休々玉懸魚の小春かな　仝

冬さうて萩の代株かな　黛人

庭ふりて温泉あふれ山をかな　子光

仝十月分

大踏房の山ようちわもれ　むさ人

芽摘也猿のよきれ鶉の声　仝

懐手習字筆冬の空　舎月

兼風や北庭出て雲の何　仝

初鶴の尾のしっぽ冬の風　金翠

緋を京ちて葉あり梅のかれ　仝

達了居乳のふもやかれ柳　月丸

三埒居や手拭置て沫さまま　如雄

白の鶉やすいと揃て甘すき　丹水

芦かれて大木もかれしくれ　仝

掉れのもとおし水都の雪の裏　仝

仝十一月分

額なら霞しゝ之戸の仏名　思声
光らぬ水も減る摺鉢の内　嵐窓
古うら衣諍ふ木枯しに戸口まで　め雄
冬の田や蒔つれる静峰　むね人
京古なまず不蛤子薄も咲れけり　三上
杉月やかられ鬼掃子撫子連　含笑
風子さらら身入る冬の月　丹水
時さ山所付きられて西施　公
囊六印

実う月の梅にかられて思ひ草　思聲

○

ゆく雲や出てきえたりなく鳴の停

判者
言外庵

書林

江戸浅草諏訪町
氷湖亭蔵

同日本橋通四丁目
勝伊三郎

第6482號
受入
昭和36.3.14